新刊批評

酒井正三郎氏の「經營技術學と經營經濟學」

室谷賢治郎

一

畏友名古屋高商教授酒井正三郎氏は最近「經營技術學と經營經濟學」と題する好著を公にされた。繙讀するに過去數年間の思索の跡を展開して遺憾なきものがある。左に讀後の覺書を綴つて見よう。

著者が此の書に於て企てることは經營經濟學乃至經營學の基礎理論を檢討するに在る。此の種の企圖は既に我が國では固より立場を異にするけれども東京帝大の馬場敬治教授及び關西學院の池內信行教授により東西相對して爲され、時には兩教授の間に批判反批判が應酬されたりした。玆に地域的に兩教授の中間に立つ酒井教授により新著が提供せられたのは頗る興味あることであるが、併し是れは實に斯學の要請が然らしめたところとも謂はねばならぬ。素と酒井教授は商業學を如何にして基礎づくべきかの問題に發足せられ、此の問題の解決を經營經濟學としての改造に於て見出さうとする獨逸學界の一傾向に同意せられ、進んで經營經濟學の根底に潛む理論を研究するに至つたのである。本書の內容を成す五つの論文は此の研究過程を明確に示すものと謂つて宜い。即ち第一の「特殊經營學の根本問題」に於ては商業學を反省して其の科學性を探求し、技術論も亦一個の知識體系或は學問として樹立せられる可能性があるかを吟味する。換言すれば、「商業學が固有の技術學として樹立せられてこそ初めてこの學問が法律學・經濟學に對して第三帝國として對峙し得る力を與へられるもの」で、「これを經營の經濟學として經濟學化することは、むしろこの學問の固有の性格を破壞し去つて他の學問領域に服從さすものである」(一二頁)。一言にして盡せば著者は經營技術學の提唱をされる。

次に第二の「經營技術學の基礎理論」に於ては技術學或は實踐科學として經營學を確立しようとする意圖を、ライプチッヒ大學の經營經濟學講師ジーベルの著「經營經濟學の對象と考察方法」（一九三一年刊行）によつて裏付けられる。但しジーベルの思想と著者の意圖と一致せぬ箇所も明かに指摘せられるのである。

更に第三の「經營技術學と經濟技術學」はシュマーレンバッハの大著「會社金融論」の邦譯者として知られる鍋島達學士の論稿「技術及び技術學」（經濟學論集第六卷第十二號所載）を機縁として、著者の抱く見解との異同を明かにする。鍋島學士の考察によれば「經營學の對象は經營であり、經營は一の經濟技術的組織である。經營學はこの對象の性質に基き、經濟技術學として、經濟學とは別個の認識體系を成す。（中略）然るに經濟技術は經濟によつて規定せられたる、技術の具體的存在である」（右論稿の序）。畢竟、鍋島學士にあつては「經營學は經濟制度學と共に、經濟技術學として確立されたるとき始めて、經濟學の一員たる地位を脱し、經濟學と對等の王國を建設し得るであらう」（右論稿の終句）。之に對し酒井教授の提唱は飽くまでも經營技術學に係り、經濟技術學の主張に同ずることは出來ぬのである。

進んで第四の「統制經濟下における企業者の任務」は保守的な經營技術學の攻究から一歩を進めて進步的な經營經濟學の解明に及ぶ際の報告と見ることが出來る。企業者の職能並びに人格は時代に伴ひ變遷を重ね經營指揮者であると共に經濟指導者として考へられ、又資本家的企業者たるに止まらず管理的企業者或は職業的企業者として擡頭するから、「新時代の企業者の任務は有能な經營指揮者であるばかりでなく、經營國家政策・經營社會政策の擔ひ手でなければならぬ」（九五頁）と論ずるのである。

終りに第五の「經營經濟學の基礎理論」は獨逸のディプローム・カウマン（商學士）の稱號を有するシェンプルーグの力作「個體經濟學における方法問題」（一九三三年刊行）及び「經營經濟學の認識對象」（一九三六年刊行）に盛られた思想を樞軸として經營經濟學を科學的に肯定しようとする態度を示す。此の場合、著者はシェンプルーグの思想に見出される難點を「三つの國民經濟學」の著者ゾムバルト並びに「經濟と科學」及

び「國民・國家・經濟・法律」の著者ゴットルの構想を援用することによつて補說せられ、理論的經營學の類型を左表の如き組合せを以て示される（一九五頁）。

認識對象＼認識方法	說明的	了解的
技術的經營	純粹技術學	經營技術學
技術的經濟	整序的經營經濟學	了解的經營經濟學

茲に至つて著者の思索は經營學を技術學的なものに固定せしめず、而も國民經濟學と別個の體系として措定する段階に到達したのである。

二

以上は酒井教授の著書に現はれた思想發展の經過を辿つての簡單な輪廓に止まる。其の苦心の反省と巧緻な構成とは評者の敬意を表せざるを得ぬところである。併しながら著者の見解にして評者の不敏理解し難い點があるから、以下之に就て記したい。

先づ著者は取扱ふ學問を「經營學」ないし「經營經濟學」と呼ばれるけれども、是れは極めて不用意な命名の仕方ではあるまいか。蓋し卒然として斯く命名せられる學問に接するとき人は其の二義性の故に曖昧な觀念を抱かせられる虞があるからである。私見によれば「經營經濟學」の略語として「經營學」を唱へることは差支ないが、單純な「經營學」の稱呼は技藝學 Kunstlehre 以外の何物でもない（拙著「經營經濟學概論」二九頁）。隨つて著者が「經營技術學」を提唱せられることに對しては評者は經營＝技術＝學の意味に於て同意することは出來るけれども、其の立場は寧ろ鍋島學士の所謂經濟技術學に左袒したいのである。即ち酒井教授の著書の表題夫自身が示す「經營技術學と經營經濟學」は „Entweder-oder“ を語るものであると解釋せざるを得ぬ。

次に著者の所見に從へば經營經濟學は經營の經濟學である。然るに評者の年來懷抱するところは之と異り、經營經濟學は經營經濟の學である（「經營經濟研究」第十九冊一四一頁拙文）。更にプリオン教授の著述の題名を籍りて謂へば「經濟經營に關する學問」こそ經營經濟學の眞の姿に他ならぬ。酒井教授が nachdenken せられたシェンプルーグの第一著「個體經濟學における

方法問題」の學問は個體の經濟學でなくて個體經濟即ち單獨經濟の學であることは申すまでもない。

進んで著者が使用せられる「經營經濟性」及び「國民經濟性」の概念の區別は明瞭を缺く憾があることを指摘せねばならる。其の根底に於て「經濟性」そのものを著者が如何に把握せられるかを與り聞きたいのである。固より「利益性」に對しての「經濟性」の説明は存するけれども、それはジーベル又はプライザーに關説する限りに於けるもので酒井教授の解答を待望する評者には不滿である。

總じて著者は一方に企業を經營經濟學の對象と斷ずるホフマン教授の叢書編纂者とするジーベルの書と、他方に經濟性を經營經濟學の目標とするニックリシュ教授を叢書編纂者とするシェンプルーグの書との前に立ち、「正」と「反」とをば「合」にまで aufheben しようと努められたかに見える。而して其の急追の餘り論議の素材となる斯學に關するシェーヤ・ニックリシュ・シュマーレンバッハ・ライトナー・シュミット・リーガー等の碩學の所説をシェンプルーグに據つて辿る捷徑を選ばれたやうに受取れる。理論の構成上採られる必然の態度には相違ないが、併し餘程注意を加へぬときは不合理を生ずる危險があると考へられる。

さはあれ本書の如き理論的所産を經營經濟學界に寄與せられた著者の功績に對しては評者は衷心祝福を贈りたい。斯學は此の後とも深化を約束せられることゝなるからである。因みに本書の成立は恩師故左右田喜一郎博士の隱れたる導きにより故博士歿後十周年に際して捧げんとする情に出づるもの、其の昔一橋橋畔の Seminar に於て漲つた峻嚴なる論理の雰圍氣は著者の筆致の間に流れて居る。評者近來の外的要請が atheoretisch の方面に向けられ Sodasche Schule として慚愧に堪えざる折柄、著者の御健在を祈つて筆を擱く。

――一九三七年十二月――